

## 特別講演 I

座長：関口 由紀（女性医療クリニックLUNA ネクストステージ）

### 泌尿器科の診療に役立つ舌診

奈良県立医科大学大和漢方医学薬学センター、  
三谷ファミリークリニック

三谷 和男

私たちは、日常診療では自分の専門領域のup-to-dateを絶えず意識しながら診察を行っています。しかし、これまで「泌尿器科領域における漢方診療」というタイトルの場合、残念ながら現代医学の進歩を全く考慮に入れない漢方治療が語られることが多かったように思います。今回は「先生、そんな話は泌尿器科医として百も承知ですよ」の声に応じて、先生方の診療に少しでもお役に立てるよう、観点を「舌診」において、先生方の日常診療にお役に立てるお話をしたいと思います。

私は「漢方医学は、ひとを生物学的な存在だけではなく、社会的な存在とみること」という指導を受けました。「漢方診療(治療)」は、決して「単に漢方薬を飲むこと」とイコールではありません。私たちは、診察室では病人さん(患者さん)と基本的には一対一で向き合い、「その人」の訴えは、身体の中のどういった変化によるものかを追求し、多種多様な検査を行っていきます。これは、私たちが大学を卒業して以来、徹底的にトレーニングされてきたやり方です。主病名を考え、鑑別診断をできるだけ多くあげることが求められます。その後、病名を決定して治療方針を立てます。この現代西洋医学のスタイルは、効率的で患者さんの治療に大いに役立つ方法です。しかし、一方では「特に問題はありませんよ。」に対し「いえ先生、どこも悪くないなら、なぜこんなに不調なんですか？」を生み出すわけです。漢方医学に目が向けられる理由の一つはここです。もう30年以上も前でしょうか、一時、漢方薬が西洋薬に比べて安全性が高く、効果も優れていると喧伝された時がありました。しかしそういった物言いに「どうも胡散臭いな」と、真摯な西洋医学の先生方が一斉に離れていかれました。残念でした。しかし、その時の漢方医学界の姿勢にも私は大いに疑問を持ちました。それなら漢方薬も単なる「くすり」じゃないか?と。確かに漢方薬は「くすり」かもしれないけれど、実際に目の前の難治といわれた病人さん(患者さん)が元気になっていくのはなぜか? 私たちは、決して不定愁訴を目標にしてるわけではありません。薬理的に漢方薬が西洋薬よりも効果があるというのは間違いです。では、何を治しているのでしょうか? 病人さん(患者さん)はひとりでは生きておられません。家族が、友人がおられます。職場(学校)の中で生活を営んでいる地域との関わりはどうでしょう。社会の影響抜きには考えられませんし、四季の変化も……。「漢方医学では病人さん(患者さん)を社会的な存在とみる視点がある」ことが、カギになるのではないのでしょうか? 「くすり」として漢方薬を出すのもいいでしょう。しかし、それだけでは漢方治療とはいえません。私は、舌診の所見を通して、先生方の診療の場に病人さんを意識する時間を設け、守備範囲をどこまで広げて治療方針を立てるかを明日から実践していただきたいと思います。